「本の記憶」

学長　西村　　健

本の効用はいろいろある。読むことの楽しみ、知識を得る、教養を高める、言葉を覚える、文章作りを習う、想像力を養う、生き方を教えられる等などである。これらは読んだ本の内容によって得られる効用である。しかし、それとは別に、本との出会いそのものの効用がある。読むだけでなく、見たり、触れたり、聞いたりしたことも含めて、その本にかかわる記憶の効用である。

一冊の本をめぐる記憶は、その本の内容を超えて広がるものである。本を読めば、その本の内容や、その本から受けた感動を記憶している。しかし、本が読者に与えてくれる恩恵はそれだけではない。その本のことを思い出すと、その本を読んだころの自分や時代や出来事も甦ってくる。幼いころの記憶は多くないものである。しかし、幼いころ読んだ本は、本の内容の記憶は薄らいでいても、本を手にしたときの自分、本を読んだ場所、その本にまつわる人たちのことなどさまざまな記憶を残してくれる。それらの記憶はその本との出会いがなかったら、残ることがなかったかも知れない。

私自身の幼少時の体験も本の記憶に助けられて思い出されることが少なくない。幼稚園児のころ、講談社の絵本が沢山揃えてあった知人の家へしばしば行って絵本を読ませてもらったこと、その家の私より年長の姉妹から優しくしてもらったことなどが絵本の表紙の絵とともに今でも鮮明に浮かんでくる。その家で読んだ北欧の童話「ニルスの冒険」の強い印象が三十歳になってからノルウェーへ留学する動機付けになった。小学生のころ私の家では学習参考書以外の本は買ってもらえなかったから「のらくろ」、「少年探偵団」、「怪人二十面相」「少年少女世界文学全集」などはすべて友人の家で読ませてもらった。それらの本のことと共に本を読ませてくれた友人やその家族のこと、友人の家の辺りの風景などが生き生きと思い出される。記憶が呼び起こされるのは自分が読んだ本からだけではない。先ごろ亡くなった本好きの妻が書棚に遺した本の一冊一冊は、妻がそれらの本を手にしていた日を呼び戻してくれる。

作家加賀乙彦氏が若い時に読んだ本を再読したときの体験を「それを読んだ場所や情景が鮮やかによみがえり、自分でもびっくりする経験が何度もあります。読書は読む人の人生の記録でもあるのです」と述べている。同感である。本の記憶が人生の記録をより豊かに、より鮮やかに、より長く保存してくれるのである。